

令和元年度京田辺市男女共同参画審議会（第2回）議事録

（1）第2次京田辺市男女共同参画計画(改訂版)の概要について

委員：家事を夫と妻で同程度分担している人の割合で、職業を持っている人と主婦の人とを一緒にしているのはすごくおかしい。どこの調査でもこうなっているのだが、分けるべきではないか。主婦業の人は、それはあなたの仕事だと言われてもしかたないし、両方が仕事を持っていて同じだけ収入があるなら、その場合はやはり半分ずつにしてもらわないと困る。これは分けられないものか。

委員：確かに、専業主婦と職業をお持ちの方は、一緒にしてはおかしいと思う。

われわれの年代はどうしても専業主婦が多かったから、少し引かかる。

委員：次の計画の目標設定のしかたについては、もちろんこれからの新しい時代に向けて新しい目標を考えるということも必要だろうし、それと同時に、全国調査と比較することによって見えるところがあるかもしれないということもあるので、今後みなさんで議論していければよいと思う。

（2）第3次京田辺市男女共同参画計画の策定について

委員：男女共同参画推進会議、ワーキング部会というのはどのようなものか。

事務局：庁内の職員で構成される会議で、推進会議は計画に載っている事業を担当する部課長、ワーキング部会はその事業を担当している担当者レベルの会議である。

事務局：市役所の中で担当者レベルあるいは部課長レベルで構成する会議に内容を諮り、審議してもらった内容を審議会でご審議いただくという三段階構造になっている。

委員：推進会議とかワーキング部会でこの事業や事業内容を決められるのか。高齢介護の施策など事務局（市民参画課）が所管する事業以外の事業を審議すると言っても、われわれは、ああそうですかとしか言えない。庁内で決められたものを見て、それでよろしいかという審議会なのか。

委員：評価も職員がやったのを持ってきてこれでよいかということなのだが、よいかどうかなど全然わからない。それをやるのがこのワーキング部会だという、そのシステムはわかった。

事務局：事業については、計画を策定するときにわれわれ市民参画課が中心となって各課をヒアリングさせていただいて、もちろん担当課からも意見を

もらって最後まとめている。それを年度ごとにそれぞれできているのか評価しているが、それが男女共同参画の推進につながっているのかということについては計り知れないところがあり、それについては、市民意識調査などで市民のみなさんの意識がどう変わってきているのかを検証するという形になっている。審議会のみなさんに143の事業を一つずつ審査していただくという訳にはなかなかいかないと思うので、市役所の中でしっかりと評価をさせていただき、それをご報告させていただいている。

委員：市民意識調査というのはどういう方法ですか。

事務局：市内の住民の方を抽出させていただき、その方々に、郵送により調査票を送らせていただく。それを返信用封筒に入れて返していただくという形で実施していきたいと考えている。

委員：対象者の人数は。

事務局：今のところ3,000人を予定している。年齢を決めさせていただいて、無作為で3,000人を抽出させていただくが、京田辺市の他の計画についても大体3,000人くらいの規模でアンケートは実施させていただいている。

委員：回収率はどれくらいか。

事務局：前回の有効回収率は52.7%となっている。

委員：計画の構成の中で「将来像及び基本的施策の大綱などを示します」とあるが、現行計画で言うところの将来像、基本的施策、この言葉のつながりはどう理解しておけばよいのか。

委員：国の将来像であって、京田辺市の将来像はないのではないかと。

委員：計画というようなものは京田辺だけでつくるのではなくて、国から下へおろしていった京田辺市ではこうというように、ブレイクダウンしていくというのが本来の形ではないかと。

委員：それが本来の形だが、やはり国の将来像と京田辺市の違いというものも、アンケートの結果を見て出してくるべきだと思う。単純な集計だけではなくて、もっと有意差があるものないものを全部出してくて、国はこう言っているけれども京田辺の特徴としてこういうのがあるという部分も、もっと出すべきだと思っている。だから例えば、職業を持っている人のところで、フルタイムか、パートタイムか、専業主婦かというのは絶対とっているはずだから、フルタイムと専業主婦で分けてどこに有意差があるかとか有意差がないかというのを検証すれば、京田辺市の特徴というのはすぐに出てくるので、そういう集計をしていただいたらよいと思う。

委員：この中に具体的に大綱というのは出てきていないが、要は基本目標と

というのが将来像として設計されているのだと思う。次の計画のときには、これまでの計画の策定のあり方として非常に多くの細かい事業が全部入っているということについてどうなのかということはいろいろご意見をいただいているところであるし、これまでのことに引きずられることなく新しいやり方について検討いただかないといけないので、現在の審議会の意見をまずは庁内のワーキングで十分認識していただいてからアイデアを練っていただかないといけないと思う。ですから、もしみなさんご意見があれば今お出しいただいて、それをもとに庁内のワーキングで案を練っていただければいいか。そうでなければ、庁内から出てくるものを審議する形になる。今もしご意見があればそれを共有してもらえればと思う。

委員：目標の数字があって、何%が何%に上がってきているという表示のしかたをされているが、基本的にこの審議会では男女が一緒に参画するという気運を高めようということで審議をしている。数字が上がるだけではなく気運が上がったような実感がないと思っている。専業主婦とそうでない方とはまた立場が違うし、いろんな人が気運が高まったと実感できるような施策を、ワーキング部会で練ってほしい。数字だけにとらわれずに、例えばどこかへ家族で一緒に遊びに行ったときにお父さんとお母さんが同じように活躍するであるとか、お父さんとお母さんの役割を踏まえた上でその特性を踏まえて何かをした事例を出すとか、普通の人と考えて認識しやすいようなイメージ戦略みたいなものがあればもっと効果的だと思う。

委員：実際どうすればもっと男女共同参画社会になるのかというところで、例えば会社ではどんなふうに男女平等にしておられるのかとか、家に帰ったらこうなさいということをおられるのか教えてほしい。

委員：正直、会社の中では男女が同じように仕事に就いてやっていて、男だから女だからという考え方はほとんどない。とは言え、われわれの会社は製造業で特に女性の割合が低いので、女性を増やしていこうとしている。幹部職を含めて、女性の割合は年々増えつつあるというところである。

委員：職場では男女平等だということになると、女性が家に帰ったときにどれくらい苦労しておられるのかとか、男性も同じように半分ずつやるのか、そのへんはどうか。

委員：うちの妻も働いているが平等にはなかなかできていない。妻のほうが一生涯懸命やっている。

委員：それはどこに問題があると思われるか。私は、男性の意識だと思う。意識が低いのだろう。一緒にやらないといけないという意識がない。

委員：その意識を高めるのがこの審議会の目的になる。

委員：平等イコール満足度が高いとはちょっと離れていると思う。お茶くみに命を懸けている女性がいても、満足であればそれでよいと思う。平等イコールみんなが幸せかと言うと、そうでもない気がする。

委員：では例えば、息子さんが職場でお茶くみに命を懸けておられたら、どうおっしゃるか。実態はお茶くみというと女性の役割と見られがちなので、職業とか役割に男女の差がつくというところが問題であって、そのところをわかった上でお互いに分担できていれば問題ない。意識を見るのにいちばんよいのが統計データであって、個別に聞いてもたまたまその家ではということになるので、全体を把握するためにはやはり統計が重要だということと、一方で数字が出ているけれど実態として感じないというご発言があって、統計的に出るというのは現象面としてはかなり大きな動きが出ているということにはなるが、統計的なデータとともに実際に実感できるような、あるいは目に見えるような形で変化が起こるようにしていくためにはどうしたらよいのかということもみなさんにお考えいただいて、それを計画に反映させることが大事だと思う。

委員：男性が育休をとって職場に戻ったら居場所がないということがきのうの新聞に載っていた。これが現実だと思う。転勤させられたり、これをもって辞めろと言われる。だから、育休も権利ではなくて義務化するような、取らないと罰則があるというところまでやってもらわないと、実際、育休に関しては取りにくいと思う。

委員：私は以前百貨店に勤めており、大半が女性という中で、30年40年前でも女性が専務になられて経営陣にも入っていた。だから、そんなに男女という意識はないが、会社のあるいは企業の、あるいは家庭の問題がそこに内在していることは間違いない。個人の問題というよりは、家庭によって違うだろうし、企業によっても違うだろう。私は入ったときからそういう環境で慣れていたので何とも思わない。そういうような社会になればよい。

委員：目標を数字だけで出したときに、家事を夫と妻で同程度分担している人の割合というときの同程度というのは、難しい部分がある。台所に入って妻と同じようにごはんを炊いておかずをこしらえてというのが同程度なのかと言うと、それはそうではないと思う。その間に男性は何か違ったことを家庭の中でやればそれはそれとして同程度とみなされる。だから、われわれが会社で目標を設定するときには、数値目標と定性目標の両方を出す。数字だけで評価すると、よい数字が出るけれども結果はマイナスになっていることがあるし、数字が悪くてもプロセスがよければそれは定着するというよい面があるから、そういう二つをかみ合わせたような評価をできれば

よいのではないか。

委員：数字もある一側面だけの反映かもしれないので、使えるものは便利に使って、それに振り回されないようにしなければならない。

委員：143の事業をもう少し縮小したらよいのではということが出ていたが、せっかく新しくやっていく計画だから、やはりそういう意見があれば一度考えるべきだと思う。それと、市長の政策もこういった中に反映できるものがあるのかどうか。これも一つ、反映していけるものがあれば取り込んだらよいのではないか。そうすれば、京田辺市というのはこういう、他とは違うものがあるんだと、子育てだったら子育てというものに対して京田辺市はものすごく進んでいるとかいうようなものが出てくるのではないか。

委員：これまでの計画は事業がたくさん入っていて、庁内のすべてのところがいろいろな事業をやる上で男女共同参画を意識するという視点を入れていて、それは全職員がこの取組について理解してくれるという上では非常によい方法であったと思う。でも一方で、この間の議論でこんなにたくさんという話が出たのは、計画を立てるとき、大きな目標を立ててそこに集中して行って、そこから波及効果として他のところにも変化が起こってくることをねらうという方法もある。どちらがよいか悪いかというのは現状を見ながら考えていかないといけないと思う。まんべんなく広くみんなで少しずつ変えていくという方法なのか、これで行くという大きな目標を設定していくのか、そのあたりも含めてワーキングとか推進会議でご検討いただきたい。

委員：市民意識調査がよりたくさん回収できればみんなの意識がわかると思う。書く人にとってはすごく面倒くさいことで、ただアンケートに答えてくださいというだけでは、こんなの時間がないということで出してもらえないと思うので、何か書いたことによって得られる代償みたいなものがあったら、よりたくさん回収できるのではないか。私のところにアンケートが来たときに、答えてくださった方にはクオカードをお送りしますというのがあって、それだったら書こうかなという気持ちになるので、プールの割引券とか無料券とかを付けてぜひアンケートにお答えくださいとか、何か、これを書いてちょっと嬉しいことがあるというようなものにすると、回収率が上がるのではないか。予算があるので可能かどうか分からないが、できればそんなこともできたらよいのではないかと思う。

委員：回収率も上がるし、意識の低い人の意見も収集できる。

委員：日本古来の差別というのはまだまだ残っている。その中の一つに男女というのもあろうかと思う。学校教育で、人権に関わることは系統立って小さいときから教育されている中で、その子たちが社会に出て行ったときに、

まったく人権を学んでいなかった人たちに比べると意識改革もずいぶん進んでいると思うが、われわれの年代はなかなか意識を変えるのには大きな壁があって、今の高齢者の中には意識が変わっていないところもあると思う。例えば演歌では、特に女性という立場の曲が多い。いつまでもあなたを待ちますとか、耐えますとか、しのびますという歌詞が多いが、それに共感している人がまだ多い。もちろんそうではない歌もたくさんあるが、日本人の心に共感しているということが現実なので、そのへんも男女共同参画の中の現象として見つめていくことが大事だと思う。日本の文化をどう切り替えるかということは、これは並大抵ではないと思う。それから、アンケートの数字について意見が出ていたが、例えば学力診断テストの数値を上げることは、私はそんなに難しくないと思う。だが学力が低い子もいる。数字が公表されるので、その子がいなかったらということで昔は欠席した子もいたと聞いたことがある。数値は一つの目安にはなるが、1点、2点、5点の差とか、私はまったく気にしない。それから、私は昔から参画という言葉がどうもなじまない。国から出ている言葉だから変えるわけにはいかないが、もっと市民にとってなじみのあるようにしてはどうかと思う。何か大きな行事をするのか、ずっと地道に取りくんでいくのかどちらがよいのかということについては、私は、大きく変えようと思ったら京田辺の大きなメインイベントにして、小さいお子さんから、ぼくたちのまちは男の子も女の子も仲がよいんだということを全国的にも誇れるような大きな行事をして、よその府県からでも注目されるような奇抜なことでいくのもよいのではないかなと思う。

委員：今出たご意見の中だけでも、次の計画の中で言葉の選び方からいろいろと気をつけなければいけないと感じた。先ほどの学力試験もそうだと思うが、統計のデータも一概に平均点だけで物を言うのが間違いのもとなので、平均点と言いながらすごく格差があるのか、特定のグループが離れているのか、まんべんなくばらばらと低いのか、そのへんで対応策も違うので、数字なども注意をしながら見ていく必要があるだろうし、回収率の問題も、答えない人たちはやはり関心がない人だと思うので、そういうことも含めて考えないといけないということで、今日はたくさんご意見をいただけてよかったと思う。

以 上